

# 山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、  
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。  
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 財団法人自治体国際化協会ニューヨーク事務所のローカルスタッフと打ち合わせをしているところ。赴任当初はかなり苦労したという英会話でのコミュニケーションにもようやく慣れてきた。

2 日本消防協会の随行でグランドゼロを視察した際の写真。この写真の中に高橋さんの姿はないが、ぜひ紹介したい写真としてピックアップ。奥に聳えるビル群がなんともニューヨークらしい一枚だ。

3 地方自治制度の調査に行ったときの写真。取材先のデラウェア州政府教育省のウィルソン副教育長とのツーショット。やや緊張した面持ちの高橋さん。さまざまな人々との出会いもまた大きな財産だ。

## 興味があることは何でもやってきた学生時代、それが社会人としての土台となっている。

**高橋 範充** 財団法人自治体国際化協会ニューヨーク事務所・所長補佐

今回のOBランナー高橋範充さんはニューヨーク在住。「山大聖火リレー」初の海外からのメッセージとなった。平成10年に人文学部法学科を卒業後、自治省（現・総務省）に入省。昨年4月から財団法人自治体国際化協会ニューヨーク事務所に勤務となり、地方自治関係団体視察団のサポート、アメリカ・カナダ国内の地方自治制度の調査などを担当している。

そんなインターナショナルな活躍ぶりが眩しい高橋さんだが、山大学生時代はどんな風に過ごしたのだろうか。「勉強はそれほどやっていなかった」と謙遜しつつも、中学校(社会)、高校(公民)の教員免許をとるために、法学科にとどまらず学部内のさまざまな科目を受講していたという。さらに、

部活は少林寺拳法、塾講師のアルバイトなど、興味のあることは何でもやっていたという行動派。あの頃の好奇心の蓄積があったからこそ、社会人となった今も自分の職業以外のことにも関心を持って本や新聞を読むようになった。このテーマは専門外だと思っても、何かのきっかけで自分の仕事に大きく関わってくることもある。国際取引法を専攻した高橋さんは、今アメリカの地方自治を調査していて、当時、講義で学んだような事態に直面することもあるという。また、countyとかplaintiffという単語が出てくると、これは西洋法制史の講義で聞いた単語だったと記憶が甦ったり、あの時は「よく」わからなかったことが、今ならわかるということもいろいろある。つまり、

大学で学ぶということは、社会人としての土台作りなのかもしれないと振り返る。

社会人になれば偏差値の差など問題ではなく、大学の講義や部活、バイトなどあらゆる場面で学んだ経験による実力差が物を言う。だから、現役山大学生のみなさんにも時間を自由に使える学生のあいだに、興味を持てるもの何にでもめり込んでみてほしいという。それらは必ず社会に出てから大きな財産になるからと。そして、語学力。海外赴任は想定外だったという高橋さんが非常に苦労した現実を踏まえて、語学の勉強は学生のうちにしっかりやった方がいいと力説。ニューヨークからのリアリティあふれるメッセージは、現役山大学生たちの心にさまざまな変化をもたらすに違いない。

活動の成果